平成 28 年度第 1 回木曽岬町総合教育会議（議事録）

日　　時　平成 28 年 6 月 30 日　午前 10 時 00 分開会

場　　所　木曽岬町役場２階　会議室

出 席 者

（構成員）　町　　長　　加藤　　隆

教育委員会

教　育　長　　山北　　哲

委　　員　　白木　　修

委　　員　　藤井　由弘

委　　員　　加藤　和子

委　　員　　大橋　洋平

（構成員以外の出席者）

総務政策課長　　森　　清秀

教 育 課 長　　西川　幸男

教　育　課　　山下　昌司

総務政策課　　中里真由美

協議事項　「郷土に学び、郷土に愛着を持ち、郷土“木曽岬”を担っていけるような人材を育成していくためには､今後どのようなことを考えていく必要があるのか」

午前１０時００分開会

【政務統括監兼総務政策課長（森)】　　皆様、おはようございます。定刻となりましたので、ただいまから平成２８年度第１回木曽岬町総合教育会議を開催させていただきます。お手元の事項書に従い進行してまいりますので、よろしくお願いを申し上げます。

まず初めに、加藤町長より皆様にご挨拶を申し上げます。

【加藤町長】　　改めまして、皆さんおはようございます。

いかにも梅雨だなというはっきりしない天気がこのところ続いております。また、九州・熊本や鹿児島のほうでは大変な豪雨に見舞われて、被害も出ているようでございます。被災者の皆様方にお見舞い申し上げたいと思います。

さて、本日は、平成２８年度第１回木曽岬町総合教育会議を開催させていただきましたところ、教育委員の皆様方、ご多用中にもかかわらず全員にご出席をいただきましてありがとうございます。

また、今日は、幼稚園の園長、そして小中学校長にも出席をいただいており、まことにご苦労さまでございます。日ごろ皆様方には、木曽岬町の教育の充実、振興発展にご尽力をいただいき、おかげさまと、子どもたちは健やかに元気に育ってくれております。また、聞き及ぶところによりますと、学力のほうも一段と向上しているといったようなことで、私も非常にうれしく感じておるところでございます。また、スポーツや文化活動のほうにおきましても、大変多くの方がそれぞれの分野で活躍をいただいており、教育、文化ともども非常に豊かになってきているということで、非常に喜んでおります。教育委員会の皆さん方に心からの感謝を申し上げたいと思っております。

さて、昨年度の総合教育会議は、今後の教育の方向性について視点を置きまして、将来を担う子どもたちの姿をテーマに、委員の皆さん方から活発なご意見をたくさんいただき、大変充実した中身の濃い会議であったのではないかと振り返っているところでございます。

本日の会議につきましては、昨年度の協議、皆さん方の議論を受けまして、将来を担う子どもたちの姿に迫っていくためには、具体的にどんな手だてや施策を展開していったらいいのか、さらに一歩深めた議論、協議を重ねていただければと思っているところでございます。人材育成は、今後の私どものまちづくりにおきまして、欠かすことのできない重要な要素でございます。今日はぜひ皆さん方の忌憚のないご意見をいただき、より一層の教育の充実、さらには、まちづくりの推進を図っていきたいと考えているところでございます。どうぞひとつ、限られた時間でございますけれども、有意義な会議にしていただきますことをお願いさせていただきまして、挨拶とさせていただきます。よろしくお願いいたします。

【政務統括監兼総務政策課長（森）】　　ありがとうございました。

続きまして、山北教育長よりご挨拶を申し上げます。

【山北教育長】　　本日はご苦労さまでございます。また、今日は、町長さん、公の席で教育の今日的な課題についての協議の時間をとっていただきましてありがとうございます。

教育委員会では、昨年の総合教育会議でいろんなことを協議させていただきました。そのことも踏まえまして、今年度、教育基本方針を定めました。そして、園、学校には既に周知をいたしまして、今町長さんがおっしゃいましたような、まちの将来を担う子どもの

育成に向けて、幼稚園、小学校、中学校、それぞれでお取り組みをいただいているところでございます。これまでの方針の中で掲げてきました地域に開かれた学校づくりから、少し前に踏み込んだ、地域とともにある学校づくりを掲げさせていただきました。

少し具体的に申し上げますと、お手元に資料がございますが、保護者や地域の皆さんにこれまでより積極的に学校運営にかかわっていただく仕組みを取り入れた学校運営協議会、いわゆるコミュニティ・スクールを立ち上げさせていただきました。園長先生、校長先生には既にそれぞれ学校運営協議会を開催していただき、その場で、園、学校の教育方針等を説明いただきました。委員の皆さんの承認を得ていただいたと、園長先生、校長先生からは報告いただいております。承認をいただいた各園、学校の教育方針に従ってこれまで教育活動を進めてきていただいているというのが現状でございます。

少し前置きが長くなりましたけれども、本日のテーマに沿ってしっかりと意見交換をさせていただき、方向性が共有できたものについては、今後の教育施策に取り入れていきたいと考えておりますので、どうかよろしくお願いいたします。

【政務統括監兼総務政策課長（森）】　　どうもありがとうございました。

本日の総合教育会議でございますが、これは、地方教育行政の組織及び運営に関する法律に基づき開催をするものでございます。この会議の運営につきましては、昨年の総合教育会議で定めました木曽岬町総合教育会議要綱に基づいて行いますので、よろしくお願いを申し上げます。

また、本日は、要綱第４条の規定に基づきまして、幼稚園長、小学校長、中学校長にも出席を求めまして、協議に必要な場合はご意見をいただきたいと考えておりますので、関係者の皆様、よろしくお願いを申し上げます。

それでは、ここから協議事項に入ります。まず、町長から協議テーマの設定についてお話をさせていただきます。

【加藤町長】　　私のほうから改めて、教育に対する考え方や思いを述べさせていただきまして、それぞれの皆さん方にさらに議論を深めていただければと思っておりますので、よろしくお願いしたいと思います。

昨年度より新教育委員会制度が施行されまして、首長と教育委員会から成るこの総合教育会議を開催いたしまして、新たな教育政策を推進しているところでございます。木曽岬町教育振興基本計画[後期プラン]は、今日的な教育課題へも対応できるような内容を盛り込んでおりまして、より実効性のある計画として策定されました。加えて、本計画が木曽

岬町の教育大綱として定めたことを踏まえまして、今後の教育のさらなる発展に努めてまいりたいと考えているところでございます。

一方で、平成２６年度からは１０年間のまちづくりの構想としまして、木曽岬町第５次総合計画を進行しているところでございます。町民起点のまちづくりを一層推進し、地域の課題解決や、あるいは地方創生に向けて本格的な取り組みを行っているところでございます。

その中で、今後の人口減少の問題は、地域経済の縮小はもとより、担い手不足による地域活力や地域機能の低下、さらには、社会基盤の維持管理費や社会保障費の増加による行財政の悪化など、さまざまな影響が懸念されているところでございます。

地方創生は「ひと」が中心でございまして、長期的には、「ひと」をつくり、その「ひと」がまちをつくるという流れを確かなものにしていく必要があるわけでございます。教育の分野においても、「次の時代を担う人づくり」という視点から、学校教育はもとより、保護者や地域住民の方々が協働をして子どもの育ちを支える地域社会の形成を私ども木曽岬町の理想の将来像として掲げているところでございまして、子どもたちが改めて地域を知り、そして地域を学び、地域を共有・発信していくという営みの中で、本町の魅力や本質を実感していくことで徐々に将来像が形づくられていくと、考えているところでございます。木曽岬町第５次総合計画の基本方針③にある「豊かな心を育む人づくり」、この中にも「郷土愛を育む教育の推進」とうたっております。

では、その地域の将来を担っていただく子どもたちの意識はどうかといいますと、「人口ビジョン・総合戦略」の中で、中学生の本町への定住意向のアンケートを先般実施したところでございますが、その中で、「わからない」と回答した子どもが実に過半数を超えていることがわかってまいりました。まだ将来に対する青写真が描けていない発達段階でございますので、このアンケート結果はある意味、子どもたちの正直な気持ちがあらわれているのではないかと捉えているところでございますが、ただ、見方を変えてみますと、定住意向がまだ定まっていないだけに、子どもたちにもっともっと木曽岬町の魅力を伝え、木曽岬町のよさを経験してもらえることで、将来も木曽岬町に引き続き住み続けたいという子どもたちが増えてくるのではないかと、期待をいたしているところでございます。

このアンケート調査の詳細につきましては、この後、森統括監より説明をさせていただきますが、こうした状況からも、若者が定住したいと思えるような魅力的なまちづくりを進めていくことが急務であると認識をいたしているところでございます。そのためにも、

子どものころから郷土に愛着を持つことができるように、ふるさとの誇りを伝え、学び、考える機会を設けて、進学などで町外に出た若者たちが帰ってきたくなるような意識の醸成を図ることが重要であると考えております。これは、毎年成人式を迎えるに当たって、新成人の方たちと語る会を催していますが、その中でも、新成人の方たちが同じようなことをおっしゃってみえます。木曽岬を離れた子たちが、やはり自分たちの育った木曽岬がいいと思っていただけるような、そういった意識の醸成を図っていくことが重要であると考えているところでございます。

以上のような思いから、今回は特に、私たちの「郷土に学び、郷土に愛着を持ち、郷土木曽岬を担っていける」ような、そういった人材を育成していくためには、今後どのようなことを取り組み考えていく必要があるのか、これを本日の協議テーマといたしまして、それぞれさまざまな視点から、人材育成、つまり「人づくり」について皆さん方のご意見を賜り、議論を深めてまいりたいと考えておりますので、よろしくお願いいたします。

【政務統括監兼総務政策課長（森）】　それでは、協議をお願いする前に、今の町長のお話の中にありました木曽岬町の「人口ビジョンと総合戦略」、そして「中学生の定住意向のアンケートの調査」について少し説明をさせていただきます。

まず、木曽岬町の「人口ビジョンと総合戦略」でございますけれども、本日、机の上にこのような冊子を２つお配りさせていただきました。カラー刷りのものですが、この概要版のほうをお目通しいただきながらお聞きいただきたいと思います。これは、国が人口減少問題の克服と経済力の確保のために、平成２６年１２月に国が提唱しました「まち・ひと・しごと創生事業」、いわゆる地方創生事業のことでございまして、この実現を図るための計画書がこの総合戦略ということでございます。

人口ビジョンと申しますのは、人口の現状と推計を分析しまして、将来の目標人口を示すものとなっております。また、総合戦略は、申し上げましたように、その目標人口を達成するために今後５年間の計画期間を設定しまして、具体的な施策を定め、事業の効果、検証を図る、いわゆるまちづくりの計画書というようなことでございます。

概要版のほう、見開きの中の資料をご覧ください。左側のところの記載ですけれども、これが町の人口ビジョンの概要でございまして、２０１０年を基軸としまして、５０年後の２０６０年でございます。このときの人口を、国の国立人口問題研究所というところの推計では、現在６，５００人ある木曽岬町の人口が３，５００人になるというような推計をいたしました。これを受けて木曽岬町では、今後の５０年後の将来人口を５，０００人に設

定するという人口ビジョンを定めたというようなことでございます。よく新聞やテレビなどで、国が８，６００万になる人口を１億人に設定してというフレーズをよく口にするんですが、この木曽岬町版というようなことでございます。そうしまして、その推計される３，５００人の人口を今後５，０００人にしていくためには、どのような施策を展開していけばいいのかというのが右側の総合戦略というようなことになってまいります。これらの施策を順次展開しながら、人口の定住化等を図ろうという意図のものでございます。

総合戦略の中身は、ご覧の４つの大きな基本目標、着色のあるところですけれども、雇用と産業振興対策、それから、定住・移住対策、少子化対策、元気な地域づくりの４つの大きな基本目標ごとの重点施策とその評価指標、ＫＰＩを定めたものとなっております。これが人口ビジョンと総合戦略の概要というようなことになっております。

なお、本日は、この概要版のもとになっております詳細の本冊のほうもお配りをいたしておりますので、また時間がとれましたらお目通しを願いたいと思っております。

次に、中学生の定住意向のアンケートのことでございます。こちらにつきましては、先ほどの人口ビジョンと総合戦略の本冊のほう、３２ページを開いていただきますと、ここに、このたびの総合戦略の人口ビジョンを検討するための１つの資料としまして、平成２５年に行いました木曽岬町が別に定めております第５次総合計画、このときのアンケートを引用した資料が出ております。町長の発言は、このアンケートのことを意図するものでございまして、中段のところの中学生の定住意識という欄でございますが、この欄の中に、住み続けたいという中学生が１０％と大変低い割合を示しております。その中でも、そのような状況の中、わからないという回答が５５％もあるという、このアンケート結果に対してどう思うかというようなこと。また、右側のページ、３３ページになりますけれども、これは中学生が答えた、今後木曽岬町に住み続けたいと思うときに力を入れることに対してのアンケート結果なんですが、防災対策や雇用の確保、公共交通の充実などが強く求められている姿が浮かび上がっております。

その資料の下段になりますが、これ以降は、このたびの総合戦略をつくるためにとりましたアンケートで、なぜ木曽岬町から転出したのですかという、直接転出者の方々宛てに送ったアンケートの結果になっております。次のページにわたって結構興味深い結果となっておりまして、転居、転出の理由というのは、婚姻ですとか進学、就職とか生活の利便性などがよくないというようなことで理由が挙がっております。

また、この本冊の２３ページをご覧になっていただきますと、ここにはこのたびの計画

づくりの中で、木曽岬町の特性を客観的に判断するために各種の統計数値を示しております。県下での町の位置づけ、それから町の強みとか弱みなどを客観的に判断できるようにということで統計データを出してございます。今後の議論に参考になればということで紹介をさせていただきました。

説明につきましては、以上でございます。

【加藤町長】　ただいま、森統括監より、「中学生の定住意向アンケート調査結果」及び「県内市町の中での木曽岬町の位置づけ」などの資料についてそれぞれ説明をいただきました。将来設計がまだ立たない中学生でございますので、定住意向でわからないというところが本音であると思いますけれども、その割合が過半数を超えている現状について、まずどのように感じておられるか、そのあたりからお聞かせ願いたいと思います。

もう一点は、さきにも述べましたが、子どもたちにこの木曽岬町の魅力を伝え、木曽岬町のよさを経験してもらうことで、将来もこの木曽岬に住み続けたいと考える子どもたちが増えてくると私は思うのでございますが、この考え方につきましても、委員さん方皆さんのお考えをお聞かせいただければと思っております。

まず、この辺から皆さん方のお話をいただければと思っておりますが、どうぞかた苦しい話にならず、肩の力を抜いてざっくばらんにご意見をいただければと思っております。いかがでしょうか。

【白木教育委員】　今、先ほど町長さん、森さんからもご説明がございましたように、前の教育委員会でも５５％がわからないというのは聞いておりまして、今委員の中でも、これは正直な意見だと、わからないというのが本当じゃないかということで意見があったのですけれども。

確かに、教育で地域に残っていただくというのはなかなか難しいことだと思います。生活基盤の整備が一番かなとは思っており、教育で地域に残っていただくということは、教育ができればできるほど出ていく子どもが多くなるかなというように思っております。一時的には出ていくだろうと思っているのですが、将来、Ｕターンとか、家庭を持つときに木曽岬に家庭を築くとか、そういうときに木曽岬に戻りたいなと思ったときに、特に中学校のときにどのようなことをやったかということによって、大きくかかわるというように私は思っているのですね。

その１つは、中学校の時期から町や地域の行事に参加をさせるということです。これは、昔のほうがもっと参加していたように思っているのです。このごろは勉強とか塾とか、い

ろんなことで大変でなかなか地域の行事に参加できないとは思うのですが、地域の行事となると、１つは子ども会の行事で、今子ども会の組織が弱体しているところが見られますが、地域の子ども会を活発にするには、中学生にジュニアリーダーとして、親御さん、育成者というんですけれども、育成者の下に中学生がジュニアリーダーになって地域の子ども会を引っ張っていくということをして、下の子と一緒にいてもらうことで、地域のことがわかるようになるのではと思います。

それから、もう一つ、町の行事に今参加させるということで、やろまい夏祭りやふれあい広場のリーダーでとして、中学生の１つのブースというか種目を、立案からずっと誘って参加させるということになれば、実行委員会に中学生の代表者が出て意見を言っていただくということですね。こうすれば、自分たちも町の行事に参加して、自分たちの意見も取り入れられてこういう種目ができたとか、こういうブースができたということができるかなと。

それから、体育祭でも、誰でも出られるというようになっており、中学生等々は、このごろたくさん出てきていると思っておりますが、前と同じように、体育祭の実行委員というようなメンバーにも中学生の代表を入れて、中学生が１つの種目を考えて実行させていくということができればいいかなと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

以上です。

【加藤町長】　　ありがとうございます。

白木委員さんからは、中学生時代から町のいろんな行事や活動に、特に実行委員という直接参画するようなスタンスでかかわってもらいながら、町のいろんな行事やイベントごとにみずからかかわっていくことによって、木曽岬の魅力というかよさというのを体感していくというのがいいのではないかというような視点からのご意見だと思いますが、ほかの委員さん方はいかがでしょうか。

【大橋教育委員】　　今の白木委員さんのことで質問があります。

以前に比べると、そういう中学生の地域へのかかわりは、失礼ですけど、白木さんが中学生の時代に比べると、何か変化があるのでしょうか。

【白木教育委員】　　確かに、そんなに変わっていないかもわかりませんが、昔は中学生が今ほど塾など、いろんなことが忙しくなかったと思います。そして、僕らの１つの例ですが、「お地蔵さん」、あれなどは中学生からやっていました。中学生がいろいろなことを計画して、買い出しなどもして、小学生を見て。あのときは男の子だけだったと思います

が、そのように小学生を見るということも結構あったように思います。

だから、お地蔵さんはいろいろと地域によって違うと思いますが、今も各お地蔵さんは子ども会がやっているところが多くて、親御さんが引っ張っているような感じが多く、その辺をもう少し中学生に参加してもらう。昔は確かにお地蔵さんはやっていた。もうちょっと子どもが地域で、完全な行事じゃなくてもいろんなことを子どもに背負わせて、幼稚園ときからかかわっていると思いますが、その辺がちょっと違うのかな。子どもさんが、中学生が忙しいということもあるのですけど。

【加藤町長】　　確かに今、白木さんが言われるように、私たちの年代のころは、子ども会そのものの活動が確かになかったんです。ところが、僕たちの世代の子どもたち、今３０から４０代かな、この子どもたちが成長した時代は、町の子ども会、あるいは育成者の会があり、各地域の子ども会の活動も活発にやっていました。町のいろんな行事に参加するのであれは、スポーツ少年団、子ども会でも、町全体での行事、活動は、そこにそれぞれ参加することもできただろうし、今白木委員さんが言われる、いわゆる村時代の昔からの慣習なりお祭り事があったと思う。そこには必ず村の若い衆もかかわって中心的にやってくれたけど、子どもたちも参加するお祭りが年に何回かあったから、やはりそういったことで、当時の楽しみというかよさというのを体感していてくれたし、子どもたちの遊ぶ場というのが、例えば川も田んぼもあぜ道もあり、いろんなところで、村の成り立ちの中で計画しながら、子どもの遊ぶ、あるいは体験する、それがひいてはやっぱりいい体験学習につながってきますので、そういったことが昔はあったと思います。今は子ども会の活動自体が非常に難しくなって、親御さんたちにそれがむしろ大きな負担になってきてしまったというような実態があるものですから。

大橋委員さんは僕らの世代より若干若いので少し違いますが、ちょうどそういった時代の変遷があり、例えば、体育祭でも子どもたちが参加する種目もたくさんあったし、競争意識もあったし、お互いに、それはある意味、非常にいい時代でいい文化だったと思いますが、今は子どもたちが少なくなってきた。そして、これは子ども会だけではないですが、ＰＴＡが多分そんな時代になってきたと思いますが、活動しようと思うと即役員が回ってくるとか、役員を受けざるを得んというようなことがあって、子どもたちは結構楽しみにしていても、親御さんに随分大きな負担になってきたということが現実じゃないかなと思います。そんなところから、白木委員さんは、中学生の時代から何らかの形で役割を持って参加してくれるようなことを考えていったらどうだということを言われたと思います。

【藤井教育委員】　今の話とはちょっと違いますが、この統計の結果、わからないという子どもが半数以上、これは自分の子どものときを考えて、親の動向で左右されるので、そんなことを考えたことがないと思う子どもが半分はいて普通だと僕は思います。それよりも問題は、ほかのところに引っ越したいという意識がある子どもが３５％いるということ。何でほかのまち、ほかのところに引っ越したいと思うのかという、僕はそのほうが大事かなと。ですから、この引っ越したいと思うその要因とか、そういうのを項目別に調査された結果があれば、それを１つずつ潰していくのが一番大事かなという気がするのですが。

【山北教育長】　私は、今藤井委員さんがおっしゃったように、確かに、他のまちへ引っ越したいという率が高いのは、アンケートで木曽岬町に住み続けるために力を入れることって何ですかということを聞く中で､先ほど森さんのほうから説明がありましたように、１つが、災害に強い安全安心な環境ということに着目していますよね。２つ目が、働く場所がやっぱり少ないのではないかというようなこととか、もう一つは例えば、道路や公共交通、バスの利便性が非常に低いという、子どもたちが心配しているこの３つのことが、例えば子どもたちにしっかりと、木曽岬の将来、あるいは現状を語っていく中で、将来的にこういうことがあなたたちが大きくなるころには改善されるような形で町の取り組みが進んでいくということが、どこかの場で聞くような機会があって、子どもたちの腹にはまっていれば、私は若干わからないという部分も、あるいは他市町へ行きたいという部分も変わってくるのではないかと思うのですよ。

そんなことから考えていくと、これまで取り組んできていることは取り組んできているけれども、まちの現状とか今後のまちづくりの目指していることについて、行政を含めたまちの大人が、子どもたちに語るような場面がなかったのではないのか。もちろん、家の中で語るようなことがあるかもわかりません。そういうことを考えていくと、１つ考えとして、例えば中学校向けに、学校の中のカリキュラムの中で、例えば町の総合的なことを語れるような、課長級が話をしに行ったり、あるいは福祉のことを話しに行ったり、防災のことを話しに行ったりというような、そういう受け皿が学校の中で、指導要領を十分こなしていかないといけないので、非常にタイトなカリキュラムの中でやれるかというと、これはまた校長先生のほうからトータル的にお話を聞きたいと思いますけれども、土曜授業というのが入ってまいりましたよね。あれは、学習指導要領を離れてもいろんなことをやれますので、例えばそこへ、今日は町のいろんな課題、これからのみんなが住むことに

ついてともに考えようというようなことで、行政の課長なり、あるいは教育のことについてであれば私なりとかいうような者が語りかけていって、子どもたちと、まちの将来について話し合うというような機会を設けていくという仕掛けは、今後１つの施策として考えていく必要があるのかなと。例えばお話を伺いますと、話が長くなりましたが、発言させていただいたりすると、なかなか中学校のときに、まちの魅力とかよさを日常生活の中で実感して受けとめることができるかというと、今藤井さんが言われたように、自分がそのころってそうですよね。

だったら、どうしていくのかというと、例えば小学校の段階の中でも、まちのよさについて考えようとか、まちの魅力について考えようということについて、例えば夏休みの課題に、５年生や６年生に、おじいさんやおばあさんや近くの人に聞いてみましょうというような課題を出していくような仕掛けづくりをしていく中で、まちのよさとかまちの魅力ということに全然無頓着だったのが、目を向けられるかもしれないという思いは、今話の中で思いました。

大人になってみれば、木曽岬の春夏秋冬ってすばらしいですよね。それが子どものころって、緑がきれいだろうと、静かな自然の鳥の声とかいろんな声が聞こえたって、さほど思わないうことですよね。でも、先ほど白木委員さんが言われたように、まちの行事にかかわっていく中で、やっぱりさまざまな体験を重ねていく中で、後になって、あのときかかわったなということでまちのことを思い出し、まちの魅力というのがじわじわと私はきいてくるのだと思うのですね。

そんなことを考えていくと、何にもまちの様子を知らせずに子どもたちにこういうアンケートをとるのではなくて、例えば、将来的に若者が定住したいと思えるような魅力あるまちは、木曽岬としてはこんなことを総合計画の中で目指していきますよというようなことを語っていく、そういうことを実感していく中でこのようなアンケートをとれば、藤井委員が指摘されたような、３５％が将来的にはよそへ行きたいという結果は変わってくる可能性はあるのかなという思いもします。

【藤井教育委員】　　そのことですが、私が思うのは、子どもの自然なあり方とか郷土というのは、ほとんど日常学校に通っていますので、学校生活そのものは郷土に結びついていると思うのです。ですから、学校教育の中で、今教育長が言われましたけれども、災害の話をして、こういうことを考えているので、地震が来ても大丈夫ですよとか、そういうものを子どもに対して話して、子どもがそれに対して安心感を得るということも大事だろ

うと思います。

それから、保育園で中学生の子どもが、赤ちゃん体験というんですか、園長先生に聞いていただければわかると思うんですが、小さい子どもに触れ合うという、そういう子ども同士の異学年というか、上級生と下級生、これは子ども会のことにも通じると思うんですが、そういう場所を増やしていけば、子ども同士の人数が減った分だけ、同学年じゃなしに、上から下まで自分たちは仲間なんだという意識が生まれると思うんです。ですから、そういう赤ちゃん体験とか、そういう異学年の交流とか、そういうことを教育に取り入れていけば、この意識が少しは変化するんじゃないかなと。

それともう一つは、やっぱりいじめという問題。子どもが、郷土というのは学校と結びつくということは、そこにいじめがありますと、それは一生消えない問題になりますし、まして、ラジオとか新聞で取り上げられるようないじめが出てきますと、その子たちだけじゃなしに関係のない子どもたちも、自分たちの町内はそういうことがあったんだという暗い感情になると思うんです。ですから、学校では、いじめという問題にも特に気をつけてやっていってもらえればなと思っております。

以上です。

【加藤町長】　ありがとうございます。

【山北教育長】　今、異年齢のかかわりということをおっしゃっていただきましたけれども、たまたま議長さんとそこでお会いして、このごろ子どもの登下校で気になる場面がよくあるよと、中学生の自転車についても。そんな中で、例えば、集団で登校している場合、これはまさに異年齢で、上級生が下級生の安全を十分見守りながら地区地区でするというようなことですけれども、朝もどういう状況で来るのか、私は学校の近くしか十分見たことはないけれども、帰りでもシルバーさんにお願いして見守りをやっていますが、その状況たるや、惨たんたる状況なのですね。だーっと長い状況でシルバーさんがついていって、せっかく安全な見守りをしたいのだけど。ただ、そういうことについても、地区地区で帰るのですから、ある程度、異年齢の子のかかわりをもう少し強めながらやっていくということは、これはまた学校の中でも指導もいただくと思いますけれども、そういうような趣旨で議長さんはおっしゃっていただいたので、よろしいでしょうか。

【伊藤好博議長】　横からいいですかな。

前からそういう意見がちょっとありましたが、地域のほうで、もうちょっと何とかならないかというのがもう５年も１０年も前から、見守り隊ができてすぐそういう話があって、

教育関係のほうでいろいろ議題の中でも話には出たりしていたのですが、一向に直らない。ずっとそうやって育ってきたから、中学校もそうですよね。私たちの時代とやっぱり違うので、並列なんて何とも思っていない。車が後ろから来て初めて、にやにやと笑ってすーっと横へのくというような状態が、小中学校同じ考え方だと思うんですよ。

そういうことから、今の時代、ちょっと変わった人がみえたりして、何だ、このやろうといって車で列にぶち込むとか、そういうのが出てくると危険は自分たちに来るので、みんないい人ばっかりじゃないぞということを教えるのではないけれども、自分で守っていくということを教えてほしいなと思うのですがね。

【山北教育長】　済みません、異年齢というので、ちょっとそういうことで触れさせてもらいました。

【加藤町長】　ほかにどうでしょうかね。加藤さん、どうですか。

【加藤教育委員】　郷土のよさを知るということだと、やはりふだんその中にいますと、それが普通になっていまして、あまり感じないと思うのですね。でも、離れてみると、あのころはよかったなとか、そのよさがわかるので、やはりいたときにそのときのイメージが悪くなければ、よさは十分に残ると思います。

そして、木曽岬のよさというのも、やはり言葉がけというのも大事だと思いますし、教育委員会ともちょっと話はしたのですが、白木委員さんが言われたように、行事に参加することに関しては、やはり行事に参加をしたいけど、そういう機会がないから出られないという子も多分いると思うのですね。そういうことに出ていかないと、やはりどういうことをやっているのかわからないし、参加して初めて、よさとか自分の価値とかがわかってくると思います。

私たちの地区でも、私の子どものときまでは、お地蔵さんで中学生がリーダーとなって子ども会を連れて引っ張っていた感じで、そのときもやっぱり小学生を引っ張らなきゃという、半強制ですけど、その気持ちは十分あったと思います。そして、そういう体験をして、やはり下の子もそういうことを感じていたと思います。

それと、登下校に関しても、前に見たときは、きれいに並んでいて、上の上級生が大変だ大変だというのは聞いていて、小さい子を叱るので、小さい子が何かいじめられていると感じて、親にちょっと言っていたということも聞いたりしましたが、それなりに上の子の言うことを聞いてついていっていたような気がします。最近はあまり見ていないけれども、やはり朝でもぱらぱらと、一緒には行ってはいるけれども、かなり間隔を置いてばら

ばらになっている感じで、もう一度徹底して言ってあげると、また早いうちに戻るんじゃないかなという気はします。

そして、本町に住み続けるというのは、自分でもそうだと思いますけど、中学校だとそこまではあまり考えられなかったと思うんですが、やはり木曽岬町もこういう努力はしているんだよというのを見せていただいたり、自分は木曽岬のこういうところを知っているというのを教えていただければ、その子たちも、はっきり言って木曽岬って何があるんだというのを、高校、その後卒業したときでも、何かわからないような状態で話していたことがよくあったので、そういうのも学校とかだったら一番聞いてもらえますでしょうし、取り入れていただきたいなと思います。

以上です。

【加藤町長】　　ありがとうございます。

先ほど藤井委員さんから、３５％の子どもたちが木曽岬から引っ越したいというか、そういった数字が出ているが、こちらのほうに重要視してご意見をいただいたと思うのですが、今いろいろ委員さんからのお話を聞いていると、やはり教育委員会、行政側も、広報、お知らせ、あるいはＰＲすることが今まで不足していたなというように私自身今感じたところです。やはりそういった機会を、限られた中ではあるかもしれませんが、時間をとって、郷土というか、木曽岬がこんなまちだよ、あるいは、こんなまちづくりを目指しているんだよというようなことを子どもたちに知ってもらえるような努力はするべきだなと今感じたところでございます。ありがとうございました。

ほかにどうでしょう。

【加藤教育委員】　　あとちょっと聞きたいのですが、例えば、いる子どもを大切にして伸ばしていくということも大切なことですが、やっぱり子どもができる家庭の方が入ってくれる努力を、地元の子が戻ってくることはあるけれども、新しい人が入ってくる努力をもうちょっとしていただけるといいかなと思いますが、難しいですよね。

【加藤町長】　　この点については一番悩みで、逆の傾向がかなり顕著にあらわれているものなので。それは木曽岬で親となって、中学校、高校、大学、就職までは木曽岬ということでしたが、結婚を機に、世帯を持つときにどこに世帯を持ってもらえるか。最近、結構、加路戸、見入あたりで何軒か、新家うちみたいな感じで住んでいただいて、逆に帰ってきてくれた子どもたちもあるので、非常にうれしいなとは思っています。

今、加藤委員さんが言われるように、外から木曽岬へというのももちろん考えています

が、それ以上に悩ましいのは、世帯を持つときに外へということと、もう一つは、未婚者が急激に増えてきていること。未婚者が多いということは当然子どもが少なくなりますが、それは、その年代の中で適齢の年代の人たちが結婚を機に外へ出られるから、たとえ少ない割合であっても、出られることによって分母が減ってしまい未婚の方が残ってみえるということで、非常に残念な傾向になりつつあるので、ここを何とか改善したい。最近何軒か新居を木曽岬の中で構えてくれている人たちがいるので、どういったことから町内に住まいを求めてくれたのか。あるいは、外へ求められた人たちに、ひょっとしたら木曽岬の中に自分たちが住める適当なところがなく隣へ行くという方も多分あると思う。だから、これはもう一度意向をよく確認して、それに向けたまちづくりを早くやっていかなければならないと。これはおっしゃるとおりで、私どもとしても重要なことだと思っています。前向きのご意見があったら、またアドバイスをいただきたいと思います。

【白木教育委員】　その件で、いろいろと教育の面で考えると、学校教育の場で、私どもこのことで、結婚してからのこともあると思いますが、教育の面として、どういうことをしていけば木曽岬に住んで子どもを託そうかなと思うかということが一番だと思います。それは小さいとき、保育園、幼稚園から小学校、中学校、全部そうですが、どういうことをやっているからとかいうことを、施設の面とか、教育の内容とか、保育園、幼稚園等の内容、そういうのをもっといろいろとホームページ等で紹介していったらどうかなと思っています。そうすると、どこかに家を建てようかと思っている方があれば、そういうものを参考にして来ていただける。例えば、電子黒板が充実しましたよとか、土曜チャレンジとかいろんなことをやりましたと、今加藤委員さんが言われたように、なかなかＰＲというのが不足していると思いますので、いろんなことをもっとどしどしＰＲしてはどうでしょう。

その１つとして、なかなか難しいかもしれませんけれども、小学校、中学校のＰＴＡ会報というのがあると思います。それを、ホームページとかいろんなものを立ち上げてもらっておるとは思いますが、全部の人がホームページを見られないものなので、僕も教育委員になってからずっと思っていますが、小学校とか中学校、学校のこと、幼稚園のことが両方わかるというように、ＰＴＡ会報を広報に挟んで、町内の全世帯に配布していただくと。なかなか予算上いろいろなことがあるかもしれませんけれども、ある地域では配っているところもあるので。もちろんＰＴＡ会費も、ほんとうは子どもだけじゃなくて全世帯から少しずついただくというくらいの考えで、もっと全体に、学校に子どもがいない人も

いる人も、みんなが学校に目が向くようにしていくということも大切かなと思います。

それから、先ほど登下校の話も出ましたが、これも多分僕が思うには、一緒に行かないというのは、子どもたちが上の子が下の子を地域で見ているということをやっていないということもあると思います。幾ら６年生のお兄ちゃん、お姉ちゃんといったって、顔を知っているぐらいで、一緒に遊んだこともない子が、一緒に何かいろいろなことをやったことがない人と一緒にと言われてもなかなか難しいけれど、そういういろいろなことを地域で一緒にやって遊んでいれば、そういった登下校も固まって行くと思います。

確かに、もう一つ、小学校と中学校の連携です。これは特に今、これは定住にかかわるかどうかということじゃありませんけれども、前の総合教育会議でも言わせていただいたんですけれども、小学校、中学校の連携というか、ほんとうは一貫校の方がいいけれども、それはなかなか難しいということで、もっと小学校の５年生でも６年生でもいいんですけれども、６年生でもクラブ活動に参加させたり、中学校の行事に来て見学なり、例えば体育祭に１種目出るとか、そういう小中の連携も密にしていけば、いろいろな面で総合的に木曽岬のことも十分子どもに植えつけられるんだろうなというように思っております。

以上です。

【加藤町長】　　ありがとうございます。

【山北教育長】　　今の白木委員さんのご意見の中で、確かに学校の様子を全部のご家庭にお知らせするということは、私はとても大事なことだと思っております。ただ、ＰＴＡ会報をお配りするというようなことも１つですけれども、実は、私は桑名に在住して、桑名の広報をずっと見ていますが、桑名の地区の学校の様子というのは実はあまりなく、うちの町の広報での教育委員会のページは、幼稚園、小学校や中学校のいろんなこととか、その方針等をコンパクトにまとめて毎回出していますが、あの量と比較にならないくらい、町内の方に発信をしています。

ただ、校長先生、園長先生は保護者宛てには膨大な量の通信を発信していただいているのです。だから、その辺のところをどこまで、さらに多くしていくのかということは今後の課題だと思います。私はあえてそういうふうに申しましたけれども、今までは開かれた学校づくりということを目指してきましたが、今後は地域とともにある学校ということを出していこうとしますと、やはり地域の皆さんに、より学校が進めようとしていること、地域にお願いしたいことということは、やはり白木委員さんが言うように、地域に発信していく必要があると思います。

広報でもそういうような、例えば学校の大きな方針、年間の方針とか、あるいは節目になるようなときに、これだけは地域で知ってもらいたいなというものがあれば、何らかの形で学校のほうから全部のご家庭に回るような工夫というのは今後の課題かなと思ってお聞きしていました。

その場合だと、例えば、町の広報の回覧のときにでもお願いできるのか、あるいは、地区回覧で２週間に１回ぐらい区長さんへの回覧があるので、こちらの中へ挟み込んでいただくことができるのか。また、今校長先生や園長先生に聞いていただいたので、これは地域の皆さんにというようなものを、どんな形で配布するかについてはご相談させていただきますので、よろしくお願いいたします。

【加藤町長】　　ありがとうございます。

いかがでしょうか。それでは、各委員さん方からそれぞれさまざまな視点でご意見をいただきました。非常にありがとうございました。今のご意見の中にもありましたように、地域に学ぶという意味から、子どもたちにどんどんまちの行事に参加したり、まちの伝統文化に触れたりすることが大事であろうということと、もう一つは、やはりもっといろんな木曽岬の行事やら、あるいは、まちづくりやら、こんなことを目指しているんだというようなことをこの際にしっかりとＰＲしていく、知ってもらえるような働きかけもしていく必要があるというようなことで、そういったことに力を入れていきたいというところは皆様方も異論はなかろうと思いますので、よろしくお願いをしたいと思っております。

町としても、実は１つの施策として、人口ビジョン・総合戦略の基本目標の中に、町主催の行事などにおける中学生の活用事業を立ち上げているところでございまして、その点について森統括監のほうから説明をお願いします。

【政務統括監兼総務政策課長（森）】　　では、引き続きですが、本日お渡しした総合戦略の本冊のほうですが、この本冊の４８ページから６０ページというのは、先ほど皆様方にご議論いただいております。中学生に限らないですけれども、要は、人口フレームを確保するための施策、定住対策ですとか、新たに転入者を呼び込もうとする施策が４つの基本目標ごとに提示して、今後５年間これに取り組んでいくという施策集ということになっております。

その中の１つですが、６０ページをごらんいただきますと、下側の表のほうですが、基本目標の４―３というところ、住民自治・コミュニティづくりの中に、町主催の行事等における中学生活用事業についてという事項が上がっております。これを少し読ませていた

だきますと、「町主催の行事等において、その企画・運営に中学生をボランティアとして活用し、」というような書き方がありまして、少し表現が適当ではありませんが、思いとしては、町行事の企画、運営に中学生の皆さんに参画を促して、地域を担う人材育成を目的とするという趣旨でつくった計画書でございます。要は、単なるお手伝いではなくて、中学生が主体的に町行事に参画をすることで、新たな発見や出会い、また、達成感を得ることで町に愛着を感じ、豊かな心の担い手が育つまち、これを形成していきたいという考えのもとのものでございます。先ほど、皆様方にご発言をいただいていることと通じるものでございます。

以上です。

【加藤町長】　ありがとうございました。

ただいま森統括監より、中学生のまちの行事への参画について説明をいただいたところでございますが、次に、委員の皆様方には、それに関連いたしまして、地域の担い手として子どもたちに意識を醸成させていくためにはどんなことが必要なのか、そういった観点からご意見を賜りたいと思いますが、いかがでございましょうか。

【山北教育長】　今、町長さんから協議の柱をおっしゃっていただきましたが、この協議を深めていくという意味合いで、今日は園長先生、校長先生にお越しいただいておりますので、実際に教育活動の中でどのような地域とのかかわりや学習を行っていただいておるのかということをご説明願った後で協議をされればと思いますけれども、どうでしょうか。

【加藤町長】　それでは、先ほど、子どもたち、特に小中学生にどのような取り組み方をしていったらいいかというお話の中で、現場のほうの幼稚園、小中学校の校長先生方、これについてそれぞれのお立場からご意見を賜りたいと思いますが、いかがでしょうか。

【柴田幼稚園・保育園長】　幼稚園、保育園では、木曽岬町の自然をフルに活用してということで、春夏秋冬を感じて、春には桜の花をみんなで見に行くということをしております。春から夏になりますと潮干狩りということで、木曽岬町ならではの自然というのはやはり小さいときから大切にして、体で体験させてあげたいなということで、毎年潮干狩りの体験はさせていただいています。これは安全面には気をつけていきたいので、保護者の協力を得ながら週二、三回しています。また、地域の方でも、手を洗ったり足を洗ったりするところがないのではないかということで、足洗いのお水を用意していただいたりとか、地域や保護者の協力を得て行っています。

また、木曽岬小唄・音頭の踊りの伝承ということで、長い間、七、八年、毎年、年に２回、保護者の方にも参加できる方には来ていただきやっており、保護者の方も体が覚えますねといって喜んでみえます。また、保護者だけでなく、どうしてこの木曽岬小唄をやるようになったかということを、子どもたちにもわかりやすく紙芝居で、小唄老人クラブの方に話もしていただいて、５４年ですか、台風で木曽岬が全滅してハウスも何も足りなくなったときに、こうこうこうだよというのを子どもにわかるように説明をしていただいたりして、この小唄の大切さ、これで木曽岬を栄えようという大切さというのも教えてもらったりしています。幼児なりの説明の仕方で地域の方と触れ合いもしています。

また、芋掘りもそうですが、老人クラブの方に、昔はへたというかつるを全部切って、この畑から掘るぞといって、スコップで掘られちゃっていましたが、そうではなくて、もうちょっとつるを残した段階で、どのようにそこに芋がなっているかということを知らない子が多いので、そういうことを老人クラブの方にきちんと教えていただくということもしています。

また、今藤井委員さんのほうから、家庭科の授業やインターンシップで中学生の方は保育園、中部のほうに来ていただいています。そして、今実習生が何人か来ていますが、実習生の中で、中学校での家庭の授業とかインターンシップを経験したことで、木曽岬町の保育士になりたいと、最後にはそういう気持ちで帰っていただけるので、このインターンシップの場、家庭科の授業というのは、すごく異年齢を超えた触れ合いでいいなと思っています。

幼稚園からは以上です。

【加藤町長】　　ありがとうございます。

それでは、小森校長さん、いかがでしょうか。

【小森小学校長】　　小学校の小森でございます。

小学校のほうでは、各学年さまざまな体験、地域とのかかわりがございますが、全て言うとかなり多過ぎますので、一部紹介させていただきます。１年生に関しては、老人クラブさんと毎年交流がございまして、休み時間にいろんな遊びを紹介していただくということで、今年も一度機会がございまして、今年は、鬼ごっこ的な部分を体育館でやっていただきました。これまでは、いわゆる昔の伝承遊びをふれあいホールのほうでやっていただいていましたが、今年は体を動かすという企画で考えていただき、老人クラブさんとの交流をしました。そして、２年生は、実は幼稚園さんと同じで、木曽岬小唄の保存会が来て

いただいて、木曽岬小唄の踊りを指導していただいています。子どもたちは幼稚園のときのことも思い出しながら踊りを覚えるということだけではなくて、夏祭りに行きたいなという感想を書いていた子もいまして、そうした地域の行事に出たいという気持ちを高めてくれるというところで、非常にありがたいことでもありますし、もちろん、おばあちゃんが来てくれてうれしかったという感想の子もいました。

そうした中で、３、４年生は飛びますが、５年生はトマトープにあります田んぼのところで毎年米づくりをしておるんですが、これも地域の方のご指導で、種まきから田植え、稲刈りという収穫のところまでしますが、ここも、手順を覚えたり、そうした体験がよかったとかいうのではなくて、地域の方がこうやって稲を育てていくんだという思いといいますか、そういったところが子どもたちに伝わるようにしていくところが、これは、教師がそういった意図を持って指導していくポイントとして持っていることが一番大事だというふうに思っておるところでございます。

さらに、６年生は、先ほど中学生のボランティアということがこの計画にもあるんですが、６年生も夏休みにボランティア活動ということで毎年していまして、こちらも社会福祉協議会さんにもお願いをして、夏休みにこうしたボランティア活動を体験できるような機会も設ける。

そして、３、４年生については、これは実は学習指導要領におきましても、地域のことを学習することが社会科の目標になっております。その目標としてどんなことが定められているかというと、地域の産業、あるいは人々の生活、そして環境、そういった活動について理解した上、地域社会の一員としての自覚を持つようにすると、これが目標ですし、もう一つの目標は、そうした地域の学習を通して、地域社会に対する誇りと愛情を育てるようにする、これも目標ですので、３年生、４年生の社会科の目標そのものがこういったところに触れておりますので、さまざまな見学ということや体験ということで、トマト農家さんのこととか、地域の設備等を含めてですが、学習は毎年同じようにするわけですけれども、やはりこの目標がちゃんと達成されるように進めるということが一番大事ですので、子どもたちは、行ってよかったという思いはまず大切にしたいんですけれども、教師側が、そこから子どもが、やはり木曽岬の地域の一員としての自覚、あるいは地域への愛情が育つような後フォローの学習指導が一番大事なポイントになってくると思いますので、そこを確認した上、社会科の学習指導という教科に関しても進めていきたいなということを考えております。

体験活動はほんとうにさまざまにしておりまして、地域の方にはお世話になっておりますので、そうした目標を大事にして進めていきたいと思っております。

【加藤町長】　　ありがとうございました。

星野校長先生、どうでしょう。

【星野中学校長】　　中学校のほうですけれども、木曽岬町を担っていけるような人材育成といいますか、中学生に力をつけていくということで、今お配りしているのは、たくさん活動状況がありましたので、それを一覧表にさせてもらいましたが、これに触れていると時間がありませんので、全体的なことをお話しさせてもらいます。木曽岬町を担っていけるような中学生に育てるという点につきましては、今、学校全体がアクティブラーニングという授業形態でやっておりまして、これは行動的な学習といいまして、主に４人グループ、小グループになってお互いに学び合うというような形態でやっております。そこで、できるだけ一人一人が主体的に授業に参加していくということで、その中で一人一人が考えを深めて、それを友達と交流すると、そのことでコミュニケーションの力もつきますし、自分の考えも深まっていくということで、そういった授業形態にしています。

これは３段階ありまして、まず、これまでやっていたコミュニケーションですね。先生が一方的な話をするということになると、これについては、ある程度の知識はつくんですけれども、自分が考えたとか、あるいは参加したという意識があんまり生まれないということがあります。次の段階でいきますと、参加型といいますか、参与型といいますか、そうなると、横のつながりができ、先生が何か話をすると、それについて自分の考えを持った上で４人で考えを交流するというところに、自分の考えが深まったり、あるいはコミュニケーションが生まれるということになります。それを学校の授業の中でもやりますし、いろんな活動の中でも行っています。

そのことによって横のつながりができるんですけれども、ただ、課題は、学校教育の中ですので、先生の手のひらの上でやっているということがあるんですね。それをさらに深めると、今話題になっている参画型と。これは全部任せていくと、生徒にそれを任せていって、生徒がそれを企画するということになります。それを学校の中でどんなふうにしていくかということになりますが、今のところ、生徒会のやっているようなことを、体育祭であるとか文化祭であるとか、そういったことについては子どもたちに任せていく、そのことによって力がついていくということになります。

では、それを地域のほうでやっていけるのかどうかということについては、そういう地

域の場が与えられるかどうか、どこでやるのかということになりますが、今のところは学校の中で力をつけているという状況でして、地域とのかかわりと今度はなりますが、今、地域の方から学校のほうにたくさんいろいろご支援いただいているという現状があります。地域の中の方もありますし、地域外から来てもらっている方もある。それがここにあります一覧表に載っています。まず、地域の方から学校へというところ、木曽岬町内の方からということ。それから２つ目は、木曽岬町外の方から。それに対して、子どもたちが地域にお世話になっているので、地域に出かけていきましょうということが２番の学校から地域へということで、そこにありますけれども。

その中で幾つか紹介させてもらいますと、まず、職場体験学習というのがありまして、今１７の事業所へ行っていますけれども、これまでは五、六人だったんですが、徐々に人数を少なくしていまして、今は二、三人で参加しているということで、できるだけ地域の方にかかわっていくと。しかも、いろんな事業を経験していくと、その中で仕事の厳しさというものを味わっていこうというようなことがあります。

それから、エのところの文化講座とありますが、これは、もう７年ぐらい前に始まったんですけれども、生徒会の子たちが地域の方と触れ合いたいということが出発点になりまして、地域の方に講師になっていただいていろいろ教えていただくという講義が始まっております。それから、オの木曽岬音頭・小唄、踊りですけれども、実は学校のほうで今やっていまして、ちょうど今の時間にやっているのですが、浴衣の着方教室を２年生のほうでやっていまして、これは毎年やっているのですが、浴衣を着せてもらっていると。その後、では、小唄の踊りを踊ってみようということを新しく今年企画しまして、保存会の方が今来ていただいて、踊りの練習をしているということがあります。

というのは、今の中学２年生の子がちょうど小学校のころから小唄を習い出したということがありまして、ちょうど知っているということもあり、今中学２年生の子に最初に教えたということがありますが、それを保存していこうと、行く行くはお祭りで踊っていったらどうかなと。

あと、１年生と３年生については、今体育の授業の中で踊りを必修で習うというのがありまして、フォークダンスでもいいし、ほかのダンスでもいいですが、その中で木曽岬音頭・小唄の踊りを全学年やっていこうということを考えています。

あと、ケの農業体験ということで、地域の方にいろいろお世話になりましてこういうことをやっていたりとか、あるいは、コの思春期ライフプラン。先ほど、赤ちゃんふれあい

セミナーとありましたが、毎年１０組の赤ちゃんとお母さんに来ていただいて、中学２年生の子にいろいろ触れ合いで赤ちゃんを抱かせていただいていると。今年は一応１３組の予定でしたが、ちょっと都合が悪いということで１０組の方に来ていただきましたが、非常にたくさんの方が毎年来ていただいて、その中で５組の方が木曽岬中学校出身で残っていただいているということで、すごいなということで、その中で触れ合いをしながら中学校まで来ていただけると。どういうつもりで参加されましたかと聞いたら、中学校を見てみたいと。中学校の授業もどんなふうにしているのかなというのも気になって、いろいろ見ていたり、すごく関心を持っていただいていると。これは、毎年１０組前後来ていただいているということで、すごく子どもたちにも命の大切さということもわかって、いい機会だなと思っています。

あとは、木曽岬町外の方も見えます。

それから、２番の子どもたちが外へ出ていくという活動ですが、桜堤防の除草作業であったりとか、夕涼み会に出たりとか、あるいは町の防災訓練に参加させていただきました。昨年度は防災訓練に全員参加しまして、今年も中学生は参加していくということで考えております。

地域とのかかわりというのは、小学校のほうもありましたけれども、総合的な学習の時間というところで、地域の現実の社会を見せながら、子どもたちを立派な大人にするというのが総合的な学習の時間の狙いにありまして、その中で、地域の、あるいは社会の人とか物とか事と触れ合うことによって、自分はどうしていくのかと、その中で自分が活動すべきことを考えて、触れ合うことによって立派な大人になっていくと、そういうことが趣旨になります。それを小学校から中学校に受け継いで、さらに高等学校へということを考えています。

あと、最後に町の施策についての情報提供ということですが、以前、岸川政之さんに来ていただき、中学生全校生徒に向けて講演会をしてもらいました。その中で、子どもたちはすごく感銘を受けまして、それが、岸川さんが中学生を子ども扱いせずに、「君たちは将来の大人です」、その言葉だけでも大人扱いしてくれていると感動しまして。いろんなことを情報提供してくれて、高校生はこんなことをしていますよ、こんな新しい商品を開発していますよということで、いろんな紹介もしてもらったのです。ですので、先ほど教育長さんも言われましたけれども、いろんな町の施策を子どもたちに教えていただけると、いろんなことで関心を持ったりとか、あるいは、自分たちができることは何かなということ

で考えていけるのではないかなというふうに思っています。

【加藤町長】　　ありがとうございました。

それぞれ幼稚園、あるいは小中学校での取り組みについて、改めてさまざまな地域とのかかわりを持っていただいているということが非常によくわかりましたし、また、それぞれ先生方に頑張っていただいているということがよくわかりました。

今のお話を伺いまして、幼稚園や、あるいは小中学校の取り組みへのコメントやら、あるいは本日の会議全体の感想などがございましたらお話をいただければと思いますが、いかがでございましょうか。

【藤井教育委員】　　今、学校のほうからいろいろ報告をいただきまして、これだけやっていただいておれば、パーフェクトに近いような気もしますが、やっぱり学校というのが子育ての中心になっていくと思いますので、全て学校、学校と言ってしまって申しわけないと思うんですが、その学校の中で問題になっている防災の町の施策を、今後こういうことをやりたい、ああいうことをやっていくんだということを子どもたちに伝えられる時間とか、伝えられる内容は町のほうから示していただいて、子どもたちが安心すれば、それなら、よそへ行かなくても大丈夫なんだなという気持ちになってくれるようにやっていただきたいと思います。

【加藤町長】　　ありがとうございます。

実は私も今、園長そして両校長の話を聞いていて、それぞれ頑張ってやっていただいていますが、防災１つにしてもそうですが、まちがどのような取り組みをしておるのか、あるいは、どんなまちを目指しているのか、特に子どもさんたちが、小学生の子たちが関心の深い部分について、ＰＲ不足だったということを今反省しております。藤井委員さんからもそんなご発言だったと思いますので、また機会を捉えて、教育委員会、あるいは学校現場のほうと調整をしていただいて、どういう形がいいのか、また、早速そういったことも取り組みさせていただきたいと思っておりますので、またアドバイスがございましたらよろしくお願いいたします。ありがとうございました。

【大橋教育委員】　　その防災のことで、防災は防災としてやってくださる。小学校は別にしまして、私も確かに授業というときに、中学校の授業って将来何の役に立つのと。高校は別としても、数学、英語、社会、理科。もちろん、でも、それって私なりに思っているのは、もちろん受験に必要だからと。受験に必要だと割り切るものと、あとは、将来に使えるものとあって、それが一緒だったら一番いいと思うんですね。

今ふと思ったのは、防災という話が出たときに、多分中学の理科って、何か地震の話が出てくると思うんです、授業で。そうすると、あれは何かＰ波、Ｓ波がどうのこうのと何かちょっと人ごとみたいだけど、学校の先生は大変だと思うのですけど、じゃ、例えば東南海地震が起こったら、木曽岬町にどれだけの時間で津波が何メートル来るのを計算しようとか、そういうのを授業に入れられたら、きっと身近に、生徒も真剣にやるように思うのです。なので、もちろん防災はそれで大事、それを授業に生かしてもらえるようなことを、今までやってもらっていると思っていますので、今まで同様、今まで以上にお願いしたいというふうに私は思います。

【加藤町長】　　ありがとうございます。

【星野中学校長】　　それとちょっと違うのですが、英語科のほうでワン・ペーパー・コンテストがありまして、昨年度は三重県の全体のことについてのいろんな紹介を英語で書いていたのですけれども、今年は木曽岬町についていろいろ調べて、それを英語でしようということであります。そういったいろんな教科の中でも、木曽岬町のことを調べていこうと。

【加藤町長】　　ありがたいですね。子どもの小学校のころ、あるいは中学校のころは、教室で覚えたというよりも、外で体験したことのほうが忘れないね、なぜか。先生に申しわけないけど。

全体的なことでも結構でございますが、ご発言がございましたら、どうぞ。

【加藤教育委員】　　これを見ていますと、ほんとうに予想以上にいろいろやっていただいていて、ほんとうに少ないというのがだめなことばかりじゃなくて、こうやって先生方に手厚い指導とか体験をさせていただいて、その少ないのが多分いいほうには行っていると思います。ありがたいと思っています。

そして、先ほど言いましたけど、防災のことにも子どもだけじゃなくて、できたらＰＴＡの方にもそういう説明をしていただいて、親がこういうふうにやっていれば大丈夫とか、そうなったときにはこうしようねというのを親が安心したり、親が自信を持てば、子どものほうもそれが伝わったり、いろいろ話すきっかけにもなると思いまして、木曽岬のこともいろいろ理解し合ったりできると思いますので、親御さんにもそういうことをちょっと伝えていただけるともっとありがたいかなと。

【加藤町長】　　ありがとうございます。

防災のことに関しては、私は機会あるごとに皆さんに申し上げているのですが、行政と

しては一番大切な、一番大きな使命だと思っております。もちろん、避難所だとか避難経路だとか、そういったハード対策については当然優先的に進めておりますが、それ以上にもっと大事なことは、ソフト面の対策だろうと。特に、住民の皆さんが日ごろから防災についての意識を持っていただく。どんな機会でも、喫茶店でも、あるいは友達同士でも、職場でも、万が一起きたらどうしようか、あるいは家におったときはどうしようか、学校におったときはどうしようか、そんなことを日ごろから話し合っていただく、関心を持っていただくということが、ハード対策よりももっと私は大事だと思っています。特に、この４月から木曽岬町は防災指導員を設置しました。県庁のほうで防災指導等の第一線で頑張っていただいていた非常にいい方に４月から来ていただきましたので、またそれぞれ学校もそうですけれども、いろんな仲間同士で、もし日ごろそういった機会をつくって、体験しよう、勉強しようというようなお気持ちがありましたら、また危機管理課のほうへご相談をいただけたらなと思っています。特に幼稚園、保育園、そして小学校、中学校の皆さんにも積極的にまたそういった時間もとりたいなと思っていますので、よろしくお願いしたいと思っています。

【大橋教育委員】　　では、全体について、加藤町長さんは何でも好きなことを言っていいよという感じだったので。今も学校の先生方からお話を聞いて、すごくやっている、やってくださっているし、今後もやっていくと。それはそれとして、では、この協議テーマの郷土に学び、郷土に愛着を持ち、郷土木曽岬を担っていけるような人材って、できるんじゃないのというようにも思うのですね。でも、これはおそらく私の勝手な推測ですけど、この人材が１人２人じゃだめだというふうに多分皆さん思っておられるはずです。

だけど、２０６０年に３，５００人を５，０００人にしようと。１．５倍近いですよね。これは大変なことだと私は思うのです。言ってはあれですけど、私も含めて、多分ここにおられる皆さんほとんど、そのころはここにはおられないと思うんです、４４年後ですから。そうすると、やっぱり人口という、この今日見せていただいたアンケートも、人口の将来展望の中に中学生のアンケートが入っているので、ここでやっぱり木曽岬町の人口ってほんとうに大きな問題というふうに捉えられているというふうに感じたんですね。そうすると、やっぱり話に出てくる、うちのものを持っていくのも大事だけど、それはほかのところからも呼びたい。ほかのところから呼ぶのは大変だから、やっぱりうちのものを何とか。

これは、私は個人的には、図表２９のアンケートの、とり方は別だったと思うのですが、この項目の記載の仕方は不十分だと思うのです。これは話に出ていましたけど、やっぱり

理由がわからないので、住み続けたいのも理由があっただろうし、わからないのも理由があっただろうし、ほかのところに引っ越したいのも理由があったと。下に三重県の表が出ています。これはアンケートの項目が違ったのでこういう形になっていますけど、いやいや、下の表を見たら、多分これは木曽岬の人も入っていて、いやいや、今の地域に住み続けたい人が高校まで行ったら半数近くかというふうに、何か数字だけ見たら誤解しちゃうので、やはりここは考察しておられると思いますので、それをやっぱりせっかくだから載せていただきたかったなと。要は、もっと踏み込んだ、わからないにはわからない理由があったと思うので。

今、それを置いておいても、１０％だと。これは１２０人の１０％だと１２人で、その人が結婚して子を２人、1.何倍の出生率とはいえ、２人もうけたとしても４倍だから、１年に４８人ずつ増えてくるって、そんなので1，５００人増やそうと思ったらとなるので、そうすると､やっぱり何かいい意味で突拍子もない企画も必要かなというように思います。実現できるかどうかは別としても、それは何にも幼稚園、小中でやっていないのに、やっていなくてこの結果だったら、やっていきましょうと。でも、今お三方からも、こんなにやっているよと。

そうすると、突拍子もない企画って何かなとふと私が思いましたのは、何でもということだったので、思いつきで申し上げますと、例えば学校だったら、例えばですよ、宿題なしにするぞ。宿題なしイコール自学自習なしにはならないと思うのですよね。宿題ってやっぱり課せられた感があるので、やる人はやるのですが、ほんとうに恥ずかしながら、うちのどら息子は一切やりませんでしたから。星野先生、ほんとうに済みません。だから、宿題なしで、例えば、俺の授業を聞いていたら、俺の授業を受けていたら、行く行かんは別としても、三重県の高校はどこでも入るぐらいの力をつけてやるぞという、そういう何かカリスマを先生にもっと持ってもらうとか。

それから、例えば、異年齢の上下関係って、なかなか難しいとは思うんですけど、やはりこれは上と下のつながりって昔よりは希薄になっているというのが今皆さんの意見でわかったんですね。だったら、思い切って中学校の部活動をやめて、大変でしょうけど、地域のいわゆるスポーツだったらスポーツ団体に加盟して、幼稚園、小学校、中学校、場合によっては高校生も入るとか。そうすると、中学校って部活の指導が大変というのを私は３年間見ていて思いましたし、思い切って中学校の部活を一切なしにして地域のスポーツ活動にして、そこに全て入るとか、何かそういう思い切ったことも、これは私が考えるこ

とではないんですけど、企画していってもらって、何かあそこの中学校は違うなというのが桑名地区や東員地区やまた弥富地区に広がって、長い目が必要ですけど、あんなところだったらちょっと一遍通わせてみようかななんて。

これは全然話が違いますが、もう随分前に、北海道の旭川市に旭山動物園というのが、誰も客が来なくて潰れるかと言っているときに、ほかの動物園がやっていないことをやったのですよね。そしたら、何かみんな来て、来て、というようになるので。なので、なかなか学校関係って難しいと思うのですが、ほんとうにほかでやっていないようなことを思い切って、１小１中だから、ほんとうに加藤町長さんの前で申しわけないですが、ほかの地域よりはやりやすい面もあると思うんです。そういうことも、私はお願いするしかないので、申し上げました。

【加藤町長】　　ありがとうございます。なかなかぱっとした感じのご意見をいただきましたけど、この点については、まず現場のほう、教育長、どうですか。

【山北教育長】　　非常におもしろい発想で、ほんとうに思い切った木曽岬ならではの独創的な義務教育の子どもの教育というのは、おもしろみがあると思います。ただ、大きな枠があって、学習指導要領というのがありますよね。あの中で、小学校ではここまで、中学校ではここまでって、そこを完全にある程度やって、それ以外にプラスアルファというようなことで何か特徴的なことというのは、工夫の余地があるのかなと思うのですけど、また、校長先生のご意見をあわせながら、踏まえていきます。

私は今日ずーっと聞かせてもらって、大橋委員みたいな思い切った施策ではないですけれども、今後やはりやっていくべきかと思ったのは、まちのことをやらないといけないいうことが２つありました。１つは、まちの行事にやっぱり中学生が参画していくということと、それから、小学生がずっと子ども議会をしていますよね。ああいうようなことから、やっぱりまちのことをしっかりみつめていく、要は社会の一員なんだということで、まちを見直していくようなことの仕掛けというのが、これは施策の中で十分学校と連携してやっていけると思いますので、これはぜひやっていかないといけないかなと。

それと、あとは、まちの様子、まちのことを子どもたちに熱い思いで語るようなことは、どこかで学校の子どもの前でやっていったら。例えば、危機管理の担当とか防災指導員は、木曽岬は何が何でもこんなことをやっておると絶対大丈夫なんや、こういうことで頑張っていく。だけど、みんなも町の一員としてやれることはしっかりやっていく、考えて誰も犠牲者を出さんまちにしていきましょうとか。そういうことを子どもたちに、例えば防災

の面、あるいはまちづくりがこれから、例えば干拓がこうあるけれども、夢はこうなんだけれども、現実としては、あそこが供用化して開始できるまでにはこういうふうなことがあるんだよということまで話しますと、できたけれども、何にも町はやらへんのかという思いじゃなくて、いずれはこうなっていくことをしていくんですよという、そういう思いを語られるようなことを、私は課長さん方が行って話をしていただくようなことで解決できると思いますので、そういうことをまたお願いしたい。

それから、もう一つは、小中じゃなくて、高校、大学の子たちにどういうふうにまちの一員として自覚を持っていただくかの考え方として、木曽岬にあるのは、４年か５年ぐらい前から組ませてもらって始めさせてもらったのが、議長さんと町長さんと私も入って、新成人の代表とでまちのいろんな課題について話し合いをさせていただいています。

そういうこともあるんですけれども、実は、これは町長さんも三重県や全国的なことでいろいろご存じだと思いますけれども、一番近々で取り組んでおって、木曽岬は難しいけれども、いいことだなと思うのを紹介だけさせてもらいますと、実は伊勢のほうで、もちろん市長部局のほうが進めておるんだと思いますけれども、形上は商工会議所が中心になって、心ある方が何人かが集まられて、新伊勢創造「人づくり」協議会というのを立ち上げ、そして、中学生向けには例えばビジネスパーク伊勢とか、そういうテーマで１年間語りかけていくとか、高校生向けには地域が応援する高校生セミナー伊勢というテーマで、やっぱり高校生を呼んでずっと定期的に考えていく。大学生向けには、攻めの社会人養成講座というようなテーマでやっているのですが、こういう活動をずっと続けていけば、きっと自立の気概を持った若者が地域にしっかり根づくのではないのかなということで、要は昔の私塾ですね。そういうような形で何人かを集めて、年間ずっと語り続けている。そういうことをしていかない限り、口先だけで、地域に愛着を持って地域でしっかり支えていくようなということはできないのではないのというようなことで立ち上がってやっているのです。これは、調べればいろんな市町であると思うのですが、私が最近自分の調べていく中でヒットしたのはこれでした。

だから、とりあえず木曽岬としては、中学生向けに行政の人が語っていくと。あるいは、もっともっと、例えば行政以外にも、おーい先輩ということで、木曽岬町の出身の方ですとか、木曽岬の企業人とか、例えば、いろんな職業で一生懸命やっている方について話を聞いていくというような仕掛けをしていくことで、子どもたちのそういう地域社会の一員として将来自分がどういうことを担えるのかなというような意識づけになるんじゃないの

かなというのは思っておりますので、当面は、やれそうなこと２つが今日の中ですごく感じたかなということです。

もう一つは、幼稚園、小学校、中学校でいろんな地域のことでかかわっていただいておりますので、これはやっぱり教育委員会としても、どういう狙いでかかわり方をして幼稚園、小学校、中学校でかかわっていけば、町長さんがテーマに設けられたような、郷土に学び、郷土に愛着を持ち、郷土木曽岬を担っていけるような人が育っていけるのかなという切り口の中で、もう少しうちとしてもやっぱりまとめていく必要があるかな。それをまとめたものを学校、園にお示ししていきながら、それぞれのところで担っていただくようなことを考えることができるかなということを思います。

ほんとうに今日は町長さん、こんなにいいテーマで、教育を非常に大所高所から語れるようなテーマを設けていただきましてありがとうございました。ぜひ何かいい施策を考えさせてもらいますので、町長部局のほうにも協力していただくようなことが出てきましたらお願いをしたいと思います。

【加藤町長】　　ありがとうございます。

いろいろとご意見を頂戴しておるところですが、もうそろそろ時間も大分押してきましたが、全体的なことでもしご意見がございましたら、お一方、もう一方あたり、お聞かせをいただけるといいなと思っています。よろしいでしょうかね。

それぞれ皆さん方からさまざまなご意見やご感想をいただきました。地域の、まちの人材の育成への私の考え方なり、あるいはまた思いというのも随分と皆さん方のお話の中で整理をさせていただき、考え方をおまとめさせていただくことができました。幼稚園、学校教育の中では、それぞれの発達段階で、これまで以上に地域を考えていただけるような、主体的に地域にかかわっていけるような、そういった学習を展開していきたい、充実していただきたいと思っているところでございますが、大人も地域全体で子どもを育てるという視点が極めて重要であるということを再認識させていただいたところでございます。

特に、いろいろ皆さん方からご意見をいただく中で、それぞれの持ち場、持ち場、分野で頑張っていただいておりますが、私自身感じましたのは、私ども行政側がそういったことを皆さんに知っていただく、そういった広報といいますか、そういった活動がもうひとつ不十分だなという思いをいたしました。いろいろとまた担当職員とも相談をさせていただいて、また教育委員会と連携をとらせていただいて、具体的なこれからの取り組みを見出していきたいな、こんなふうに思っております。

本会議の協議をいただきまして、今後の具体的な施策展開へとつなげてまいりたいと考えておりますので、引き続き皆さん方からのご指導やらご尽力をお願いしたいと思っています。本日はまことにありがとうございました。

【政務統括監兼総務政策課長（森）】　たくさんのご意見をどうもありがとうございました。この会議でございますけれども、現時点では、年度内の再開の予定はございません。ただ、協議する事項があるときには、また会議を開催させていただきたいと考えておりますので、そのときにはご参集いただきますようにお願いを申し上げたいというように思います。

それでは、事項のほうなんですが、その他の事項について何かご発言がありましたらお伺いしたいと存じます。発言がありましたらお願いします。

では、特に発言のほうもないようでございますので、これをもちまして平成２８年度第１回木曽岬町総合教育会議を終了させていただきます。本日は、長時間にわたりまして慎重なご審議をいただきましてどうもありがとうございました。

午前１１時４５分閉会